

## 三つ子の魂の結果として

札幌市医師会  
新札幌パウロ病院

### 高階 俊光

気ぜわしい朝の通勤途中の地下鉄へ続くドアで、前を歩いていた若い男性が、後ろの私の気配に気が付いて少々立ち止まってドアを押さえてくれました。見知らぬ人からの気遣いに嬉しくなりました。それも高齢者ではなく意外に若者でしたので、なおさらのことです。最近は何だかこういうことには出会いません。最近若者のマナーの悪さが指摘されています。それで「ドアを押さえる」というちょっとした気遣いを調べてみたくなりました。

ここで述べる「ドアを押さえる」とは、デパートなどのビル、通路にある前後に開閉するドアで、先の人を足止め、振り返って後の人のためにドアを押さえることです。

調べた結果は、仲間同士、恋人同士や夫婦間では年齢に関係なく男女どちらが先でも後の人のためにドアを100%（検討症例500組）押さえていました。これは知り合い同士の間柄ですから当然ともいえます。そうでない場合、すなわち先の人を後の見知らぬ人のためにどのくらいの割合でドアを押さえるかを、男女別、大雑把に見た目で「若年」「中年」「高齢者」の3群に分けて、計1,217人を観察してみました。その結果は、若年：男性9.5%（20/211）、女性10.1%（24/238）、中年：男性12.8%（38/296）、女性11.0%（26/236）、高齢者：男性9.2%（17/183）、女性11.3%（6/53）で、合計は10.8%（131/1217）。その内訳は男性10.9%（75/690）、女性10.6%（56/527）でした。

すなわち男女の割合は共におよそ10%であり、また見た目の3群はそれぞれの男女の年齢においてもほとんど差はなく、10%前後でした。私は女性の方の割合が多く、また人間は年齢とともに周囲に優しくなり、その頻度は確実に増加するものと考えていました。ところが私の予想は完全に裏切られました。

これらの結果を見て私が思ったことは、

- ① 他人への気遣いは「三つ子の魂百まで」の諺のように、子供の時に身に付いたものはそのまま持ち続け、若年、中年、そして高齢者になっても変わらない。
- ② ある新聞の世論調査で「日本人のマナーが悪くなったと9割の人が感じており、特に悪いのは若年層」と報じていますが、決して若年層ばかりではない。

10人中1人という結果に、この割合が高いか低いか、1人でもドアを押さえる人がいるのか、それと

も1人しかいないのかの解釈は人それぞれです。

外来で若い女性から「先生、何歳ですか」と聞かれ、冗談のつもりで「100歳です」と答えたら「嘘でしょう」との返事に、「実は90歳です」と返したら「随分とお若く見えますね!」と言われたのです。そういうエピソードがあるくらい67歳にもかかわらず老けて見られる私が優先席の前の吊革に掴まっ立っていると、優先席に座っていた70歳を超えていると思しきご老人が私を見るなり席を譲ってくれました。また信じられないことに、同僚は3歳の女の子から「お爺ちゃん座って」と自分の席を立って譲られたのです。今回の対象外の3歳の幼児と70歳代の高齢者でも身に付いたマナーは終生変わらないのだろうと感じました。車内でよく観察すると、優先席に座って横に大きな荷物を置いて堂々とスマホをやっている高齢者や若者が見られます。

この検証で、仲間、恋人同士や夫婦間では気遣いのできるのに、見知らぬ人に対しては男女とも、そして男女の各年齢群とも低いとも思われました。日本人は「身内やお客様には親切で、関係のない他人となると無関心」と言われていますが（読売新聞：2017.9.5人生案内）、まさに今回の調査結果はこの事実を証明しています。

「席を譲る」ことと「ドアを押さえる」ことは他人への気遣いの表れであります。体調の悪い人や困っている人に席を譲る率はアメリカが51%、イギリスが63%、日本が何と19%です。「乗り物で席を譲る率はその国の民度のバロメーターにもなりうる」と考えらる（小檜山博：JR北海道車内誌）。「81歳の男性が妻と箱根に旅した時に、満員の登山電車などで若い男女と若い女性2人から2度席を譲られたのですが、何れも外国人旅行者であった」（読売新聞：気流）。さらに前出の小檜山博氏は「人間の知的教養の高さは、乗り物の中でお年寄りや体の不自由などの人に席を譲るかの一点で決まる」とまで言っているほどです。

つい先日のことですが、車内で座っていたら老婦人が乗り込んできたので、私はそっと立ちその方に席を譲ったつもりでしたが、先に若者が座ってしまいました。そうしたら私の隣の中年男性がその老婦人の肩を叩いて声を掛け、席を譲ったのです。老婦人は「助かった、ありがとう」と言ってニコニコ顔でした。何だかほっこりとした気持ちになりました。ちょっとした気遣いが世の中の潤滑油になることには異論はないと思います。そうです。まずは私自身も振り返らねば…。